

令和 8 年度 学力向上全体計画

学校名	墨田区立業平小学校
校長名	安部 忍

1 本校の学力に関する状況

(1) 墨田区学習状況調査結果から

成 果	課 題
【結果の概要】全国平均（標準スコア 50） 2 年 国語 52.9、算数 52.8 3 年 国語 52.1、算数 50.5 4 年 国語 52.7 社会 51.9、算数 52.6、理科 51.0 5 年 国語 54.3、社会 53.3、算数 53.7、理科 53.2 6 年 国語 55.4、社会 53.3、算数 53.9、理科 52.4、英語 51.7	
1 全国平均を上回る学力水準を維持 すべての学年・教科で標準スコア 50 を上回り、全国平均を超える結果となった。特に高学年では、国語・算数・社会・理科ともに標準スコア 53～55 台を示しており、学習内容の定着が良好である。 2 高学年で学力の伸びが顕著 5・6 年生では多くの教科で区平均を上回り、学校全体として高学年になるにつれて学力が向上する傾向が見られる。特に 6 年生の国語（標準スコア 55.4）は極めて高い水準であり、学年進行に伴う学力の伸長が確認できる。 3 基礎学力がおおむね定着 観点別・基礎活用別の結果から、国語・算数ともに「知識・技能」の正答率が高く、基礎的事項の定着が図られている。高学年では基礎だけでなく活用問題においても全国平均を上回る成果が見られる。 4 学力向上の成果が経年で確認 同一集団の経年比較では、学年が上がるに	1 区平均との差が依然として存在 全国平均は上回っているものの、2～4 年生では区平均を下回る教科が多い。区内上位校との比較では、特に中学年における学力向上が課題である。 2 思考力・表現力に関する問題に課題 「知識・技能」に比べ、「思考・判断・表現」の観点や活用問題の正答率は低い傾向がある。特に国語・算数において、自分の考えを説明したり記述したりする問題で区平均との差が見られる。 3 記述式問題への対応力に課題 教科別分析から、記述問題の正答率が選択式・短答式問題より低い傾向が確認できる。根拠を明確にして考えを表現する力の育成が必要である。 4 中学年段階での学力の伸び悩み 3・4 年生では全国平均を上回るものの、区平均との差が比較的大きい。また、集団によっては算数の標準スコアが横ばい、または低下傾向を示しており、早期からのつまずきへの

つれて標準スコアが向上する集団が多く、特に現在の 5・6 年生では国語・算数を中心に継続的な伸びが認められる。本校の指導が高学年段階で成果として表れていると考えられる。	対応が求められる。 5 教科横断的な読解力・活用力の育成が課題 社会や理科においても、資料を読み取り、自分の考えを説明する問題で伸びしろが見られる。各教科で共通して「読む」「考える」「説明する」学習活動の充実が必要である。
--	--

(2) 意識調査結果から

成 果	課 題
1 家庭との連携基盤が強い 全学年を通して、「家庭が安心できる場所」「家族が気持ちを理解してくれる」「家族は大切な存在」であると感じている児童が多く見られる。特に 2 年生や高学年でその傾向が顕著であり、家庭が子供たちの安心の基盤として機能している。	① 「友達のささえ」が全校的課題 全校を通して、「本音を話せる友達」や「困ったときに相談できる友達」の存在が課題として見られる。特に 3～5 年生でその傾向が強く、友達と一緒に楽しく過ごすことはできているものの、悩みを相談したり助けを求めたりするような深い信頼関係の構築には課題が残っている。
2 学校への適応感が高い 全学年で「いじめのサイン」や「対人ストレス」に関する結果が良好で、子供たちは安心して学校生活を送っていることがうかがえる。特に 4 年生は、「学級規範意識」「学級の絆」「対話・話し合い」の数値が高く、互いを認め合いながら学ぶ集団が形成されている。	2 自己肯定感に課題 4 年生以降では自己肯定感の低さが共通した課題として見られる。特に 4・5 年生では、学級や学校生活には適応しているものの、自分に自信をもてない児童が一定数存在している。
3 教師の承認的な関わりが機能 2 年生では、「先生が話を聞いてくれる」「先生に褒められてうれしい」という項目が非常に高く、4 年生でも教師への信頼が高い結果となっている。教師と児童との良好な関係が築かれており、本校には子供のよさや努力を認める承認的なかわりが根付いていることがうかがえる。	3 教師への相談力の低下 高学年になるにつれて、教師への相談意識が低下する傾向が見られる。児童は「先生は自分を理解してくれている」と感じている一方で、実際に困り事を相談する行動には結び付いていない。信頼関係は築かれているものの、相談しやすい関係づくりをさらに進める必要がある。
4 発達段階に応じた成長 2 年生では安心感や学習習慣、4 年生では対話や協働学習、6 年生では自己肯定感や仲間との関係が強みとなっている。学年が進むに	4 学力と承認経験の関連 2～5 年生では、学力下位層ほど家庭や友達から認められる経験が少なく、家庭や友達への相談も少ない傾向が見られる。そのため、学

つれて、基礎的な生活・学習習慣から協働的な学び、さらに自信や主体性へと成長しており、発達段階に応じた望ましい育ちが見られる。	力の課題の背景には、学習面だけでなく、所属感や自己肯定感、承認経験の不足が関係していることが示唆される。
--	--

(3) 墨田区学習状況調査や意識調査以外から明らかになっている学習に関する状況

成 果	課 題
・各学年の状況を総合すると、低学年では学習意欲や家庭の協力が比較的高く、学習に前向きに取り組む姿勢が見られる。 ・3年生では学習規律の改善が見られ、授業に参加する力が育ってきている。4年生は規律や学習への姿勢が安定している。 ・5年生は探究的に学ぼうとする意欲のある児童がいる。 ・6年生は与えられた課題には取り組む。	・ひらがなや計算などの基礎的・基本的な内容の定着に課題があり、個々の実態に応じた反復学習や支援が必要である。特に2年生では、特別な支援を要する児童の割合が高く、学習準備や集中して学習に取り組むための基盤づくりが重要な課題となっている。 ・4年生では低学年段階の基礎学力の不足が一部で見られる。 ・5年生では学力の二極化が進んでおり、個別支援の充実が求められる。 ・6年生は主体的に学習に向かう態度の育成が課題である。 ・全体として、基礎学力の定着と主体的な学びの育成が共通の課題と言える。

2 本年度の学力向上に関する主な取組

(1) 「読む・考える・説明する」力を育成する全教科共通の授業改善

<主な取組>

- ・全教科で「根拠を示して説明する」活動を毎時間位置付ける
- ・「なぜそう考えたのか」を説明する対話活動の充実
- ・国語だけでなく他教科においても、記述する学習活動を行う
- ・「書く活動」を日常的に位置付ける

(2) 中学年重点プロジェクトによる早期支援の充実

<主な取組>

- ・3,4年生を重点学年として位置付ける
- ・算数、国語の単元ごとに到達度確認を実施
- ・つまずき児童の早期発見・早期支援

- ・放課後学習教室や朝学習の充実（全学年）
- ・習熟度に応じた課題提示や個別最適な学習の推進

(3) 自己肯定感・自己有用感を高める学校づくり

＜主な取組＞

- ・毎日の授業で児童のよさを認める言葉掛けの徹底
- ・「できたこと」「成長したこと」を可視化する振り返り活動
- ・学級内で互いのよさを認め合う活動
- ・学習面だけでなく努力や挑戦を評価する仕組みづくり

3 「令和9年度 墨田区学習状況調査」の目標

- 1 中学年の学力向上による区平均との差の縮小
 - ・2～4年生の国語・算数において区平均との差を－1ポイント以内とする
- 2 思考力・判断力・表現力の育成
 - ・記述問題の正答率を全学年で2～5ポイント以上向上させる
- 3 学力下位層（D・E層）の減少
 - ・すべての教科でD・E層割合を20%以下とする
- 4 A・B層の拡大
 - ・すべての教科でA・B層割合を65～70%以上とする
- 5 自己肯定感と学習意欲の向上
 - ・意識調査 i-check で「成功体験と自信」と「学習意欲」の標準スコアを55～60以上とする